王座奪還へ

悲願のリーグ優勝に向けて
後退なしの前進はない―

前期を3位で折り返すこととなった駒大。この夏、総理大臣杯・関東代表決定戦で苦汁をなめたこともあり、優勝の可能性が残されているリーグに懸ける思いは相当なものだろう。9月6日明治大学との初戦、再び熱い戦いの火蓋が切って落とされる。

後期に向けてまず気になるのは、前期からの課題である立ち上がりの悪さだ。前期の選手のコメントを振り返ると、「立ち上がりに駒大サッカーを徹底できなかった」といった発言が目立つ。それでも後半からは修正を行い、逆転で勝利を収める試合が少なくはなかった。しかし、あくまで優勝を目標とするならば、先制点を取った場合の勝率が10割なだけに、それがどこまで修正されているか注目すべきところだ。目下首位を走る流通経大との勝ち点差は9。日本代表候補選出経験もあるGK林を中心とした、守備も強固なこのチームが、簡単に勝ち点を落とすとは考えにくいだけに、上位チームとの対決では相手に勝ち点3を与えないのは必須条件で、もちろん下

経験のその先

チームに足元をすくわれるのだけは避けたい。引き分け試合をいかに勝ちきれるか、また最低でも負けない戦いが必要となり、地道に勝ち点を積み上げていくほか道はない。後期は駒大がより我慢強く戦っていかなければならない。

そのため、主導権を握るためにセットプレーからの得点と島田のドリブル、そして三島ら前線の選手がどれだけ制空権を得られるかがカギとなる。あとは奪ったその得点を、主将鈴木・ユニバ代表候補にも選ばれた中山らを中心にチームで守り抜く必要がある。

今日まで偉大な先輩たちが築いてきた駒大サッカー部の礎に、新たなる栄光の歴史を刻む為の道程は決して楽でなく、ましてや他のチームを気にしながらなどでは到底辿り着けない。他のチームがどうであれ、とにかく駒大は駒大のサッカーを。秋田監督を信じ、選手たちがガムシャラに取り組み続けることで得られるもの。それこそが偉大な先輩たちが待つ真の王者の座ではないだろうか。（関谷　秀）